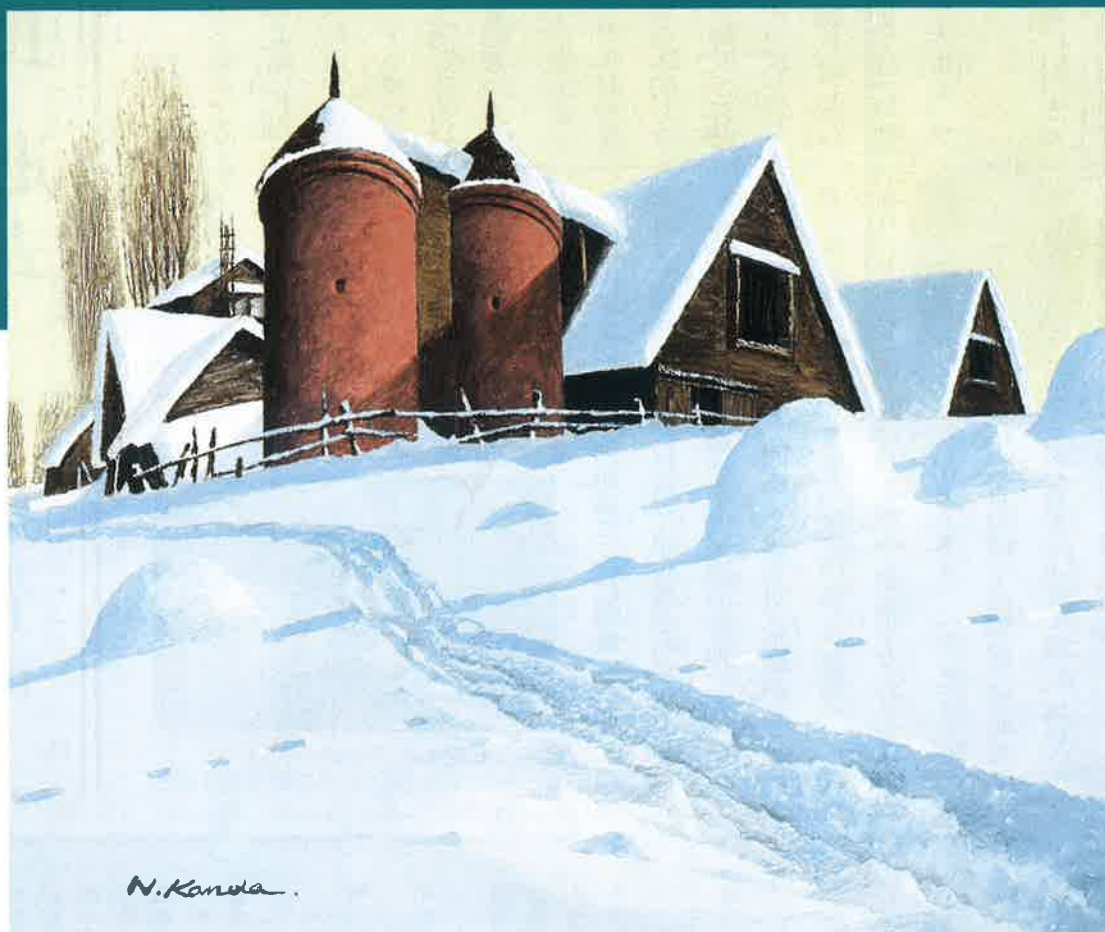


KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館だより



《雪の農場》1970年 油彩、キャンバス 37.5×44.7

 KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART
神田日勝記念美術館

〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL.0156-66-1555
<http://kandanissho.com/>

2016.3.31

33

菅訓章館長逝去

二〇一六年一月十二日



鹿追町長
吉田 弘志

菅訓章館長の御逝去は極めて残念であり、本町はもちろん、十勝の美術界にとつてもかけがえのない大きな逸材を失ったとの思いです。

館長の訃報は東京で知らされました。一月七日の午後に私の室(町長室)に来た彼に、「町長、また入院しなければならなくなった、このまま館長は務まりそうにないので職を解いてほしい。」と伝えられたばかりでした。

これまでも館長は入退院を何度となく繰り返し返していましたが、辞意表明は初めてのこと、今までは「無理するなよ。」と言う私に、「ニコツとして、「いや大丈夫、少し休めば。」と答えるのがお決まりでした。

しかし思い返すと、あの日様子は明らかにいつもと違っていました。尾道市での日勝展覧会を控えての辞意表明でしたから、彼は大きな身体の変調を感じていたのでしょう。

私が、「辞めなくてもいい、一刻も早く病院に。」と話

す間も、主治医からの連絡を待っている様子でした。

間も無く入院治療に入ったと聞いていましたが、その直後の唐突な訃報に暫し啞然とするばかりでした。



H24「新出紀久雄と水彩画の仲間たち」オープニングにて新出紀久雄氏、吉田弘志氏と

小檜山館長のもとで副館長に、後に館長に就任し、頼まれると嫌とは言え無い性格で東奔西走の活躍でした。各種展覧会準備の進捗状況や絵の移動、予算交渉などはもちろんのこと、関係する著名な画家が来ると、必ず私の室に案内するなど、実に律儀な性格でした。お互い若かりし頃、共に酒を飲み、激論を交わし、仕事をした昔が懐かしく思い出されます。

訓章館長、今はただ、黄泉の国で高橋揆郎館長と日勝談義をしながら、貴方がこよなく愛し、素晴らしい足跡を残した神田日勝記念美術館の行く末を見守って下さい。

ありがとうございます。ご冥福をお祈りします。合掌

経歴

(一部省略)

- 昭和二十五年九月二十二日 河東郡鹿追村にて出生
- 昭和四十九年三月 大正大学文学部史学科卒業
- 昭和四十九年四月 鹿追町職員(教育委員会)
- 平成三年七月 神田日勝記念館準備係長
- 平成五年四月 神田日勝記念館係長
- 平成八年四月 社会教育課長補佐
- 平成十八年九月 神田日勝記念美術館副館長
- 平成二十三年四月 神田日勝記念美術館館長
- 平成二十六年四月 帯広大谷短期大学臨時講師
- 平成二十七年五月 十勝管内博物館学芸職員等協議会会長
- 平成二十八年一月十二日 死去

表彰歴

- 平成四年十一月 鹿追町文化連盟賞
- 平成二十三年三月 NPO十勝十勝文化会議
- 平成二十三年十一月 十勝文化奨励賞
- 平成二十七年十一月 鹿追町文化賞
- 平成二十八年四月一日 十勝文化団体協議会文化賞
- 鹿追町特別顕彰



寄稿文

サヨウナラ、菅さん

美術評論家

中野 中



年が明けて間もなく、菅さんから新年の挨拶の電話をいただいた。いつものような駄ジャレもなく、元氣のない話ぶりに心配をしていたのだが、数日後に訃報が届いてしまった。



H18 斎藤吾朗氏を囲む会にて

まことに残念の極みであるが、いまはまだご冥福を祈るしかない。菅さんといえば、誰もがそのフットワークの良さをいう。実際、東京・銀座の画廊街でバツタリ出喰わしたことがしばしばあったし、六本木や上野の公募展では授賞式や懇親会でご一緒する機会も多かった。こうした行動力は画家の方々の励みになったことは勿論、神田日勝記念美術館の存在を広く知らしめることにもなった。菅さんと初めてお会いしたのは、東京・池袋のサンシャインシティであった。へ人を描く展に協力してくれたというところで水上泰財と木下晋両氏から紹介された。暮近くのミゾレ降る寒い夜、

氏は遅れて、しかも酒気を帯びていた。

さすがに無然としたが氏の軽妙な話術にまたたく間に打ち解けていた。

以来、〈自画像〉展など私の企画でお世話になったりで、毎年二度は鹿追へおじゃまするようになった。その度に夜は地元の画家と居酒屋で懇親を重ね、二次会はカラオケに流れて、菅さんの歌に酔ったりした。とにかくダジャレと昭和歌謡曲の大家であった。

私が、独立展評で神田日勝の「室内風景」に触れた。

『日本美術』誌を探し出したのも菅さんであった。この記事が日勝作品に中央誌で触れた嚆矢となったことから、日勝との浅からぬ因縁を復活させてくれたのも菅さんであった。その菅さんが逝ってしまった。私の胸には大きな空洞が出来てしまった。

合掌



H25 馬耕忌
萬崎由美子氏・佐藤友哉氏と鼎談



H23 鹿追町文化賞受賞



H18 小学校総合学習 解説

寄稿文
「個人名を冠する美術館」を
体現する行動力

木田金次郎美術館学芸員

岡部 卓



昨年十二月初旬、学芸員の川岸さんから、着任のご挨拶と本稿の執筆依頼の電話をいただき、それを年明けまで手をつけずにいたところに、菅館長の計報をうかがった。日頃の無精を悔やむばかりである。このとき菅さんと話したのが、最後になってしまった。

私が一九九七年六月に木田金次郎美術館に赴任して最初の大きな仕事で、すでに計画されていた「木田金次郎と神田日勝展」の準備だったこともあって、以降、菅さんはことあるごとに私を気に掛けてくださった。

全国美術館会議機関誌「ZENBI」のフォーラム欄に、私の寄稿を推薦したのも菅さん。次の号（第三号／二〇〇三年一月）では菅さんも「北海道から―小規模館から見た動静」というレポートを執筆、この中で北海道内の個人名を冠する美術館の動向を紹介

し、「これらの館ではいずれも単数の学芸員しか配置されないことから、学芸員の個性が館の展開に投影され、それが館の顔として形成されつつある」と記している。



H25 木田金次郎美術館にて講演

思えば、木田美の一年先輩である神田日勝記念美術館も、「しりべしミュージアムロード」を構成する各館の学芸員の顔ぶれを見て、館の個性は人の個性だ。かくいう私は、美術ではなく地域文化専攻という経歴で、初めての土地 岩内に赴任したが、木田金次郎という、地域の歴史を反映する生き方をし、地域の人たちに支えられて画業を全うした姿に導かれて、様々な企画を実現する機会を得た。その幸運に感謝するとともに、いつも暖かく見守ってくださった菅さんの姿を想うのである。

前出のレポートを、菅さんはこう結んでいる。「しかし」一方でこれらの美術館も学芸員の世代交代期にさしかかっており、その顔がどう変貌していくか、ひとつの転換期が近づきつつあるように思われる」。岩内から鹿追へ移った釜澤さんから川岸さんへ、神田日勝記念美術館のこれからの「顔」と、鹿追の皆さんが手を携える活動を、岩内から期待をこめて見守っていききたい。そしてこれまでの菅さんのご厚情と活動の幅の広さ、同時代美術史への位置付けと問いかけ、さらには次の世代に日勝の画業を引き継ぐこと、これらに情熱を傾け、「個人名を冠する美術館」を体現された行動力に、あらためて敬意を表したい。



H26 日勝祭 池田龍雄氏ギャラリートークにて



H22 友の会役員研修会



H12 無墾祭

第一期常設展

「十勝の農村、その生活の情景」

会 期：四月二十八日～十月十八日
来場者数：五、七三五名

神田日勝は鹿追で営農のかたわら絵

を描き、農耕馬や牛、廃屋や廃棄物、画材や日用品など、自らの実生活において身近なモチーフを絵に数多く描きました。第二期の常設展では当館所蔵作品をその画題、モチーフごとに紹介し、初期作品から晩年の絶筆の馬にいたるまでの変遷を辿りました。

風景画のコーナーでは、これまで確認されてきた、新緑や晩秋の農村風景を描いた作品群に加え、このたび所蔵者の方のご厚意で公開が可能となった小品《山麓の農場》（一九六五年頃）を併せて展示しました。特定の景観、個別具体的な場所を描かない点では、その他の風景画とも共通している一方、山並みを背にした構図や早春という季節は類を見ず、新たな発見となりました。

第二期常設展

「私のお気に入りの日勝さん」

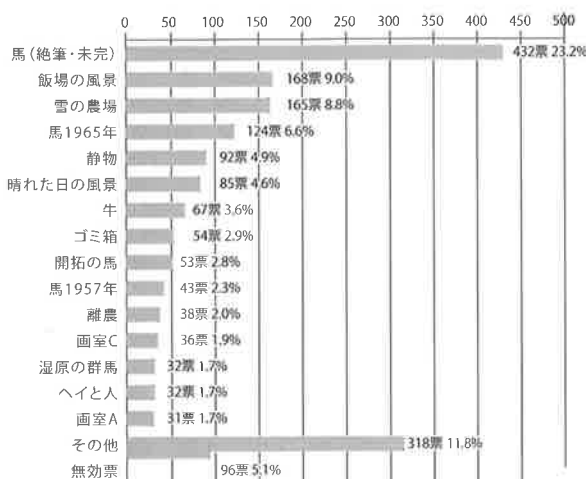
会 期：十二月八日～五月八日
来場者数：七三二人（三月三十日現在）

二〇一四年七月から来館者を対象として、収蔵品のなかから「お気に入りの一点」を選んで投票してもらった趣旨のアンケートを一年間実施しました。本展ではその集計結果を報告するとともに、特に要望の多かった作品を、そのお気に入りの理由、作品に関する印象深いエピソード等のコメントとともに紹介しました。

一位は未完の馬、半身の馬として知られる《馬（絶筆・未完）》（一九七〇年）が二位以下に大差をつけてランクインしました。写真のように馬を描き上げる描写力に対する感動や、未完に終わった画家の心情を慮るコメントが多くみられました。日勝は「結局どういふ作品が生まれるかは、どういふ生き方をするかにかかっている」という言葉を残しました。絵筆を通じて「いかに生きるか」の問いを切実に画面に投げかけ続ける、その営みの力強さ、そして優さを感じさせるがゆえに、絶筆の馬の絵は多くの人の心を揺り動かすのかもしれない。



募集期間：2014年7月1日～2015年6月30日
応募総数：1860通/1866票（複数回答有）



Part I

平成27年度特別企画展

神田日勝と全道展



神田日勝《静物》1966年 神田日勝記念美術館蔵

10/20▶12/6

会場：神田日勝記念美術館

来場者数：843名

神田日勝の全道展(全道美術協会展)への作品出品は、一九六〇年の第十五回展に始まります。そこから毎年同展に出品を重ね、七〇年に惜しくも三十二歳の若さで急逝するまで、十年にわたって同展を主たる作品発表の場としました。このわずか十年の期間に出品された作品群は主題、造形ともに変化に富んでおり、同時代の美術動向や他の画家との交流から影響を受けながら自らの表現の確立を目指しました。

初出品の翌年に出品した《ゴミ箱》は、廃材を暗褐色のモノトーンで統一された画面に描いた作品で、第十六回展で道知事賞を受賞しました。兄の神田一明とその妻で彫刻家の神田比呂子もそれぞれ教育長賞受賞と会友入りを果たし、一家揃っての快挙と新聞でも注目されました。対象を画面いっぱいに取り上げ、端から端まで丹念に描きあげる描き方は、その後は色を取り入れながら《牛》や《馬》、そして《シンやジャガイモなどの収穫物を筵の上にずらりと並べた《静物》へと繋がっていきます。同作は六六年の第二十一回展で会友賞を受賞し、神田日勝は同展会員に推挙されます。この追い風を受け、意欲的に新たな画風の作品群を展開していきます。写実的描写からいったん離れ、色と形による絵画的効果に主眼を置いた「画室」シリーズを開始し、さらに原色による鮮烈な色彩を激しく画面に塗りたくった表現主義風の《人と牛D》、《作品B》を手がけました。一九六〇年代はアンフォルメルと呼ばれる



一木万寿三《リンゴの木・サッポロ》
札幌芸術の森美術館蔵



米坂ヒデノリ《母と子》
札幌芸術の森美術館蔵

芸術運動の強い影響下で抽象美術が勢いをもっており、日勝も自らその表現手法を取り入れています。

さて、日勝が作品を出品していた六〇年代は、創立当初からのベテランと仰がれる作家達に加え、新進気鋭の若手作家達が台頭してくる華やかで厚みのある時代でした。創立会員のひとりである一木万寿三の《リンゴの木・サッポロ》は、画家にとって故郷の象徴であるリンゴの木を、テレビ塔が出来たばかりの新たな都市景観とともに描きました。八木伸子の《集》は八木に珍しい抽象画で、当時の抽象美術の影響の強さが窺えます。栃内忠男の《影》、《翼》はシャコ貝の独特の形態を平面性を強調させた色面で構成し、対象とも具象ともつかない独特の表現を掘り下げました。寺島春雄は十勝画壇の先輩画



八木伸子《集1》
札幌芸術の森美術館蔵



本田明二《北洋の男》
北海道立近代美術館蔵



北岡文雄《旅の宿の自画像》
北海道立近代美術館蔵

家として神田日勝も含め、多くの若手画家がその自宅を訪ねました。その遺作として出品された《無題》は、それまでの作風とは異なり、死を予期させる象徴的なモチーフが散りばめられた作品です。日勝と同じく全道展、独立展で若手として活躍していた竹岡羊子の《CARNIVAL II クラウン》の賑やかで熱狂的な画面には、画家自身の高揚感が満ちています。版画分野では、北海道の版画界を牽引し、国外の評価も高い北岡文雄による《旅の宿の自画像》、彫刻では、北洋漁業の漁師の顔を大胆かつユーモラスにデフォルメした本田明二の《北洋の男》、そして釧路出身の彫刻家で神田日勝ともゆかりのある米坂ヒデノリの《母と子》、《祖国》を展示しました。その表情も身振りも抑制された素朴な人物像は、歴史に翻弄された人々の深い悲しみや怒りを背負っているように感じられます。

当時のベテランから若手までの洋画家、版画家、彫刻家の作品が一堂に会する展覧会場に神田日勝の作品も並びました。本展覧会場の雰囲気もまた、アンフォルメル派の激情に駆られたような表現に刺激を受けつつも、それぞれの分野で競合しながら自己の表現世界を切り拓き、深めていくとした時代の熱気を感じさせるものでした。

用語解説

*全道展

一九四五年（昭和二十）年に当時北海道に疎開していた作家達が中心となり、道内で自由な創作活動ができる場を求め、全道美術協会が発足。翌年六月に創立展、十一月に第二回展が開催された。創立会員：居串圭、池谷寅二、木万寿三、伊藤信夫、岩船修三、上野山清貞、小川マリ、小川原脩、川上澄生、菊地精一、木田金次郎、国松登、斉藤後隆、高橋北修、田中忠雄、田辺三重松、西村貞久子、橋本三郎、松島正人、三雲待之助、山内社夫（二十名）。

*アンフォルメル（非定型絵画）

一九五二年にフランスの美術批評家M・タビエが命名したフランスの芸術運動。フォートリやデコブリエを先駆として興り、色彩と筆触による画面上の激しい効果に主眼を置いた表現を特色とする。戦後の抽象美術の発展に強く影響した。

■ 関連事業 ■

美術講座 「60年代の北海道美術の潮流
—全道展をめぐって—」

講師／井内 佳津恵 氏(北海道立近代美術館 主任学芸員)
11/6 [参加人数] 20名



リアリズム論争、アンフォルメル、具体など、戦中、戦後の美術の重要なキーワードをおさえながら、実際に北海道の画家達によって描かれた作品一点一点を、スライドを使って解説していただきました。

齊藤先生とめぐる ギャラリー・トーク

講師／齊藤 隆博 氏(画家・全道展会員)
11/14 [参加人数] 23名

「どの細部を見ても画家の熱気が伝わってくるようだった」、「当時あんな絵を描く人はどこにもいなかった」と当時の画壇を振り返り、日勝の作品が異質な存在感を放っていたことを語っていただきました。



親子ワークショップ

ハリキリアート

Hari Kiri Art:色とりどりの『さかな』をつくろう

講師／阿部 典英 氏(現代美術家)
11/21 [参加人数] 27名



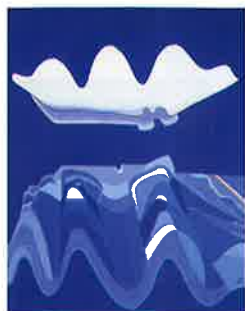
ポスターや画用紙を切り貼りして『さかな』の絵を作りました。おもしろい形や色を探し出し、自由に組み合わせることで、ユニークな色・柄の『さかな』がたくさんできました。

特別企画展「神田日勝と全道展」出品目録

作家名	作品名	制作年	材質	寸法 (H x W x Dcm)	所蔵先
1 神田日勝	家	1960年 (昭和35年)	油彩・ベニヤ	111.0 x 111.0	神田日勝記念美術館
2 八木伸子	集1	1960年 (昭和35年)	油彩・キャンパス	138.0 x 72.5	札幌芸術の森美術館
3 神田日勝	ゴミ箱	1961年 (昭和36年)	油彩・ベニヤ	121.0 x 161.0	神田日勝記念美術館
4 神田日勝	人	1962年 (昭和37年)	油彩・ベニヤ	121.0 x 168.0	北海道立近代美術館
5 一木万寿三	リンゴの木・サッポロ	1962年 (昭和37年)	油彩・キャンパス	130.3 x 97.0	札幌芸術の森美術館
6 神田日勝	坂・足・頭	1963年 (昭和38年)	油彩・ベニヤ	114.0 x 165.0	北海道立近代美術館
7 神田日勝	飯場の風景	1963年 (昭和38年)	油彩・ベニヤ	138.2 x 161.5	神田日勝記念美術館
8 米坂ヒデノリ	母と子	1964年 (昭和39年)	木 (カツラ)	125.0 x 50.0 x 45.0	札幌芸術の森美術館
9 神田日勝	馬	1965年 (昭和40年)	油彩・ベニヤ	144.0 x 163.0	神田日勝記念美術館
10 寺島春雄	無題	1965年 (昭和40年)	油彩・キャンパス	106.0 x 72.0	北海道庁立美術館蔵
11 神田日勝	動物	1966年 (昭和41年)	油彩・ベニヤ	143.9 x 163.0	神田日勝記念美術館
12 神田日勝	野雀D	1967年 (昭和42年)	油彩・ベニヤ	163.0 x 163.0	北海道立近代美術館
13 神田日勝	人と牛D	1968年 (昭和43年)	油彩・ベニヤ	163.0 x 223.0	北海道立近代美術館
14 神田日勝	作品B	1969年 (昭和44年)	油彩・ベニヤ	160.3 x 129.0	神田日勝記念美術館
15 北岡文雄	旅の宿の自画像	1969年 (昭和44年)	木版・紙	54.0 x 60.4	北海道立近代美術館
16 堀内忠男	翼	1969年 (昭和44年)	油彩・キャンパス	162.1 x 130.3	北海道立近代美術館
17 米坂ヒデノリ	組国	1969年 (昭和44年)	木 (カツラ)	33.7 x 27.1 x 50.0	北海道立近代美術館
18 本田明二	北洋の男	1969年 (昭和44年)	木	32.0 x 28.0 x 50.0	北海道立近代美術館
19 神田日勝	人間B	1969年 (昭和44年)	油彩・ベニヤ	225.3 x 160.0	神田日勝記念美術館
20 竹岡羊子	CARNIVAL クラウン	1970年 (昭和45年)	油彩・キャンパス	161.8 x 151.0	札幌芸術の森美術館
21 堀内忠男	影	1970年 (昭和45年)	油彩・キャンパス	227.0 x 161.8	札幌芸術の森美術館
22 神田日勝	馬 (未完・絶筆)	1970年 (昭和45年)	油彩・ベニヤ	133.0 x 204.0	神田日勝記念美術館



寺島春雄《無題》
北海道立帯広美術館蔵



堀内忠男《影》
札幌芸術の森美術館蔵

「展覧会事業実行委員会主催事業」



水彩画同人展
鹿追展

四月二十八日～五月十日
神田日勝記念美術館

「入場者数」七九一名

水彩画の新たな地平を目指して創設された気鋭の水
彩画家の同人展。鹿追展を記
念して十勝在住会員の作品
も併せて展示されました。



木田詩子彫刻展

六月一日～七月五日
神田日勝記念美術館

「入場者数」二〇三三名



埼玉県出身、ブロンズや石
膏で独自の詩的な作品世界を
発信し続ける女性彫刻家の個
展。埼玉県川越市の呼友館協
力のもと、十勝管内中札内村
の作品展と併催されました。



从展―鹿追展

四月二十九日～五月十日
鹿追町民ホール

「入場者数」七九八名

中村正義によって「自由な
創作活動を希求する個々の
作家とその連帯に支えられ
たグループ活動」と語られた
異色画家集団の移動展です。

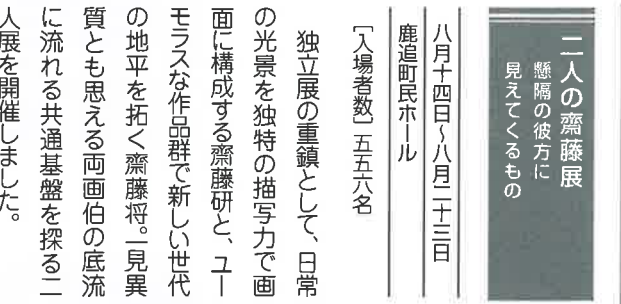


水彩と木版の競演
大原裕行・森信雄展

六月十七日～六月二十三日
鹿追町民ホール

「入場者数」五〇〇名

ともに千葉県に在住し、水
彩人の中核として活躍し十
勝の水彩画壇の指導者とし
てもゆかりの深い大原裕行、
房総の光景を木版画に投影
する森信雄。この二人展は無
墾祭の関連事業として開催
されました



二人の齋藤展
懸隔の彼方に
見えてくるもの

八月十四日～八月二十三日
鹿追町民ホール

「入場者数」五五六名

独立展の重鎮として、日常
の光景を独特の描写力で画
面に構成する齋藤研と、ユ
ーモラスな作品群で新しい世代
の地平を拓く齋藤将。見異
質とも思える両画伯の底流
に流れる共通基盤を探る二
人展を開催しました。



フレンドリー十勝
―響きあう心
神田日勝に捧げるオマージュ

八月十日～八月二十三日
神田日勝記念美術館

「入場者数」六七名

逗子在住の酒井忠康の書に、
阿部典英ら札幌近郊の美術家
の作品と、十勝在住の池田緑
らによる現代アート作品、鹿追
町出身の熊代弘法の作品な
ど、十二人の作家の個性醸し出
す交流展となりました。





文部科学大臣賞
北海道教育大学附属釧路中学校 3年 牛木 乙帆

〈講評〉
この作品も馬の毛の質感や量感が上手に表現されています。また写真のようにじっくり描くのではなく自分の感性で対象をとらえようと多くの作品に大変感銘をうけました。これからも他の真似をしない独創性に富んだものを目指して頂きたいと思えます。

とこころで絵にかける時間の問題ですが、人の心を打つ作品を描くには十分時間をかけて、熱心に

取り組むことが必要です。あまり時間をかけずに終わってしまった作品との差が目立ち残念に思えます。
作品の中には馬の表情や躍動感など描き方を一点に絞り、自分が表現したいものがはっきりしているものがあり、描く姿勢が素晴らしいと思えました。

(齊藤隆博審査委員長
講評より一部抜粋)

第二十二回
馬の絵作品展
十月六日～十月十三日
鹿追町民ホール
〔応募点数〕 八五二点

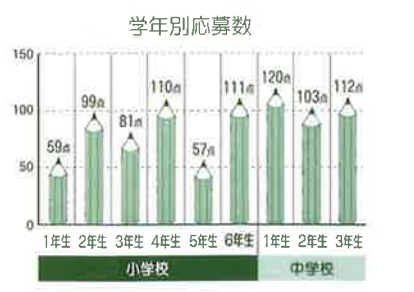
表彰式 十月十日

入賞・入選者が十勝管内をはじめ、はるばる岩手県からも来町され、緊張な面持ちながらも晴れやかな表情で賞状等を受け取っていました。自分の馬に再会した子ども達は、照れくさそうに、そして誇らしげにキラキラした表情で作品を見つめていました。



第21回 馬の絵作品展 入賞者一覧

- | | |
|--------------------|----------------------------------|
| 〔文部科学大臣賞〕 | 北海道教育大学附属釧路中学校 3年 牛木 乙帆 |
| 〔北海道知事賞〕 | 釧路市立鳥取中学校 3年 富田 望来 |
| 〔北海道教育委員会教育長賞〕 | 留萌市立港南中学校 1年 吉岡 娘響 |
| 〔鹿追町長賞〕 | 釧路市立鳥取中学校 2年 桶谷 開 |
| 〔鹿追町教育委員会教育長賞〕 | 鹿追町立上幌内小学校 5年 宮下 愛菜 |
| 〔神田日勝記念美術館長賞〕 | 盛岡市立北畑川小学校 3年 高橋 未来 |
| 〔北海道新聞社賞〕 | 釧路市立中央小学校 4年 佐藤 菜央 |
| 〔十勝造形サークル委員長賞〕 | 釧路町立別保小学校 2年 森田 土井こころ |
| 〔帯広市教育研究会図工美術部会長賞〕 | 室蘭市立海陽小学校 4年 三島 穂積 |
| 〔J R 北海道社長賞〕 | 千歳市立東千歳中学校 2年 函館市立柏野小学校 1年 牧村 咲優 |
| 〔北海道電力(株)帯広支店長賞〕 | 札幌市立三角山小学校 6年 森田 遥香 |
| 〔帯広信用金庫理事長賞〕 | 釧路市立鶴野小学校 5年 高橋 悠吾 |
| 〔ホテル福原社長賞〕 | 釧路市立鳥取中学校 |
| 〔審査員特別賞〕 | |



町内のライディングパークへ出かけ、乗馬体験もしつつ、馬を間近に見ながら「馬の絵」を完成させました。和田仁智義・内藤智香両先生の指導を受け、暑い中ではありますが、じっくり観察しながら一生懸命馬の姿を描いていました。

七月三十日
鹿追町ライディングパーク
〔参加者〕 十六名

馬の絵
写生会

第二十一回

蕨艮土祭

六月十七日

神田日勝記念美術館

鹿追町民ホール

【参加人数】 二〇〇名

開館を祝う会として毎年開催され、展示室内でのコンサートと、町民ホールでのワインとチーズの交流会の二部構成で行っています。コンサートでは「まへへ」混声合唱団による美しい調べに酔いしれ、



交流会ではワインを口にふくみほろ酔いとなり、友の会會員有志の手作り料理に舌鼓を打ちました。交流会中にアンコール演奏も行われ、会場と一体になり交流を深めることができました。

第二十三回

馬耕忌

八月二十三日

鹿追町民ホール

【参加人数】 五十七名

「馬耕忌」は神田日勝の命日(八月二十五日)に近い日曜日に、その画業を偲んで開催されるイベントです。

第二十二回目となる本年は、「小規模美術館の明日を語る」というテーマで館長鼎談をおこないました。上園氏、松本氏にそれぞれ自館の設立背景や活動の特色を、紹介いただいたのち、当館館長も交えて小規模美術館の現状と課題を談義しました。

さらに恒例となっている田中光俊氏によるギター演奏、開催中の「二人の齋藤展」出品作家である齋藤将氏によるギヤラリー・トークが行われました。



登壇者：
上園 四郎 館長 (笠岡市立竹喬美術館/岡山県)
松本 郁子 館長代理 (刈谷市美術館/愛知県)
菅 訓章 館長 (神田日勝記念美術館)

第十三回

日勝祭

十二月八日

鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館

【参加人数】 五十四名

「日勝祭」は、神田日勝の生誕を祝い、毎年開催されており。今年も当館名誉館長かつ「日勝祭」の名付け親でもある作家の小檜山博氏による「北海道に生きて」と題した講演会が行われました。北海道の食・農の未来について考えていくことや、命を繋ぐ食・物をつくる農家が一番大事であること、また、日勝作品に対する熱意を町民へ伝えていくことなど、美術館としての活動の広がりについてもお話されました。その後は交流会で親睦を深めるひとときを過ごしました。



芸術鑑賞バスツアー

5月31日
美瑛町・旭川市 [参加人数] 35名

拓真館では風景写真家「前田真三」のギヤラリーを、北海道立旭川美術館では「古代エジプト美術の世界展」を鑑賞してきました。旭川美術館ではプロジェクターを使った解説もしていたとき、ただ鑑賞するだけでは知りえなかった部分まで、より詳しく知ることができました。



日勝さんの道草さがし

11月1日
【参加人数】 17名

友の会会員を対象としたツアーで、神田日勝がこの土地で過ごした少年時代を、現地を巡って深く知ることを目的とした初の試みでした。

ツアーの案内役として、日勝の少年時代をよく知る脇坂裕氏と渋川巖氏にご参加いただき、日勝との想いやエピソードを語っていただきました。



春休み



春休みワークショップ

ちょうちょのキーホルダーを作ろう！

講師／伊藤 彩子氏（帯広百年記念館学芸員）
3/25 鹿追町民ホール
【参加人数】16名

プラスチック板を使い、トースターでチンッ！
できあがったのは、「ちょうちょ」。事前に色ぬり
をしたカラフルな「ちょうちょ」たちはギュッと縮ん
でキーホルダーになりました。

冬休み

冬休みワークショップ

アニマル小皿を作っちゃお！

講師／鹿追町陶芸工作館職員
1/8 鹿追町民ホール
【参加人数】18名

鹿追焼き用の粘土を使って動物柄のお皿を作
りました。サル・ネコ・イヌの型紙から好きな動物を
選び、講師指導のもと、こねたり、たたいたり、の
ばしたり…。後日、素焼き・本焼きを経て、かわい
い小皿ができあがりました。



夏休み



夏休みワークショップ

キミも化石を手に入れよう！

講師／澤村 寛氏（足寄動物化石博物館館長）
8/4 鹿追町民ホール
【参加人数】31名

石膏を型に流し、「化石のレプリカ作り」を行
いました。真っ白なレプリカに思い思いの色をつ
け、シックなものからカラフルなものまで様々な
化石ができあがりました。

出前講座

6/24 鹿追町立瓜幕中学校

学校からの呼びかけで、今回は中学1年
生の美術の時間を活用して行われました。
スライドを利用し、日勝の生い立ちや作品の
解説に始まり、その後、馬の絵作品展の主旨
や経緯を説明しました。過去の同展上位入
賞作を直に見てもらい、構図の捉え方、筆の
タッチ、色の重ね方に着目しました。生徒た
ちは同年代の画力に感嘆の表情を見せてい
ました。



アートキッズクラブ（全5回）

5/16～2016.2/20

鹿追町民ホール 【参加人数】92名

「玉石ではしおきを作ろう!」、「水を使ったリサイクル工作 絵は
がきを作ろう!」、「キラキラ★クルクル「かざぐるまを作ろう」」、
「巨大すごろくを作って遊ぼう!」、「スタンドグラス風のキャンド
ルを作ろう!」の内容で5回実施しました。ボランティアの方々の
手助けもあり、子どもたちにたくさん楽しんでもらえたのではな
いかと思います。



絵画教室～油絵講座

講師／今西直人氏（国画会準会員・全道展会員）
1/26 2/2 2/9 2/16
神田日勝記念美術館 【参加人数】5名



絵を描くことに親しみを持ってもらうこと
と、愛好者の更なる拡充をねらいに当館で
は久々の開催となりました。5人中3人が初
めて油絵に挑戦するも、丁寧に描き方を教
えていただき、参加者は苦戦しながらもア
ットホームな雰囲気の中、談笑しながら楽し
んで制作できたようです。

音声ガイド

当館では6年前からiPod touchによる無料の音声ガ
イドを運用しており、今回初の試みとして、特別企画展
「神田日勝と全道展」の音声入力を帯広南商業高校放
送局に依頼しました。今後も継続的に取り組み、若い学
生達に神田日勝の作品や当館の活動を知ってもらうと
同時に、学校側にも学生の日々の活動の成果発表や、
学生の自信や実績に繋がられる場として活用してもら
えるよう、連携の可能性を探っていきます。

協力：北海道帯広南商業高等学校



子ども芸術鑑賞バスツアー

10/24 帯広市
【参加人数】20名

北海道立帯広美術館&おびひろ動物園に行ってきました。
美術館では、「猫みれ展」と「羊、羊、牛、牛」（メエメエ
モー）展で作品を鑑賞、動物園では普段は入れないゾウのナナちゃん
の「家」にお邪魔できました。最後は園内の遊具に乗って大はしゃぎ。
「動物づくし」の1日でした。





神田日勝《山麓の農場》1965(昭和40)年頃、油彩・ベニヤ、16.2×23.0cm、個人蔵

寄託作品 紹介

雪を冠した山並みを背に、これから春を迎えようとする農場の風景を描いた本作は、作品所蔵者からの報告によつて新たにその存在が確認された作品です。現所蔵者が一九六五年に帯広の老舗画材店「ありた文具画材店」で本作を入手し、その際、画家が画材代の代わりとして置いて行った作品と聞いたとのこと。日勝は一九六八年頃から売り絵として小品の風景画を多く手がけますが、本作はその頃の一群とは景趣や構図も異なり、興味深い一点です。

感想ノートより

1988.神田日勝の絵に出会った年です。当時ここに住んでいた一年半ぜったい忘れない絵になりました。今2015.2度目の再会です。変わらない日勝の絵。目に焼きついていた馬、北海道の臭いがします。

福島県郡山市 A.W

2年前、NHK日曜美術館で神田日勝のことを初めて知りました。それ以来ずっといつかは来てみたいと思い、やっと願いがかないました。予想以上に素晴らしい個人美術館で土地(地域)の人々に愛され、誇りとされていることがわかりました。この才能と作品、生き方がもっと多くの人に伝わり、広がっていくことを願わずにいられません。

2015.8.23 大阪 M.Y

2015.10.3(土)AM 富良野から5人姉妹旅の始めの美術鑑賞。田舎生まれ育ちの私達。日勝さんの生活感、人生の証しが込められていて、感動しました。ありがとうございました。

神田日勝の未完の馬が見たくて横浜から来ました。馬の肌をとことん描き込んだ絵具が強烈なパワーで、本当に感動しました。色々美術館に行ってもなかなか感動することがありませんでしたが、日勝の絵には徐々に心を打たれました。ありがとうございました。

2015.11.15 Y.T



6.19 何度見ても
良いものですね。

木田 詩子
《詩を紡ぐ》



森 信雄
《天津の歩道橋より》



寄贈作品 紹介

藤野 千鶴子
《伝説の陽》ほか1点



阿部 典英
《オマージュ日勝》



書籍掲載

小学館刊行の『日本美術全集』(全二十巻)の第十九巻に、神田日勝の《室内風景》(一九七〇年、北海道立近代美術館蔵)が掲載されました。北海道にとどまらず、日本の戦後美術の流れのなかで特筆すべき画家として数えられています。ぜひご覧ください。

榎木野衣 責任編集
『日本美術全集 第十九巻
拡張する戦後美術』
小学館、二〇一五年

